

江戸を旅する

明治に学ぶ

梅謙次郎

山陰の歴史、経済、教育・文化

近世・近代の貴重史料を
中心に、

江戸・明治期における

山陰地域のエネルギーな

歴史、経済、教育・文化活動を

読み解きます。



3館合同企画展示・講演会に寄せて



島根大学長 山本 廣基

島根県立図書館、松江市立図書館、島根大学附属図書館の3館による合同企画展示・講演会「江戸を旅する 明治に学ぶ」が、島根大学附属図書館と新築なった大学ホールにおいて盛大に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

島根大学は、昭和二十四年五月、当時の松江高等学校、島根師範学校、島根青年師範学校を母体として、文理学部、教育学部の二学部からなる新制大学として発足し、島根農科大学の国立移管や島根医科大学との統合を経て、五学部を擁する地域の総合大学として発展し、開学六十周年を迎えることができました。

新制大学発足前の旧制松江高等学校や師範学校、さらに遡れば島根県小学校教員伝習所など、本学の母体となった教育機関の重要な歴史があります。今回の展示や講演会で取り上げられている、幕末から明治にかけてこの地にあった藩校、私塾から、激動の新国家の発展に貢献する多くの人材を輩出してきたことが、本学の母体となった教育機関の発展につながったと言えるかもしれません。

折しも、松江市においても「松江開府四〇〇年祭」と銘打って様々なイベント、記念事業が行われています。この四〇〇年祭、そして私どもの六十周年が、将来に向けてのますますの発展の契機となりますよう、ともに努力してまいりたいと思います。

平成二十一年十月



江戸を旅する 明治に学ぶ

平成21年度3館合同企画展示・講演会実行委員長

平川 正人

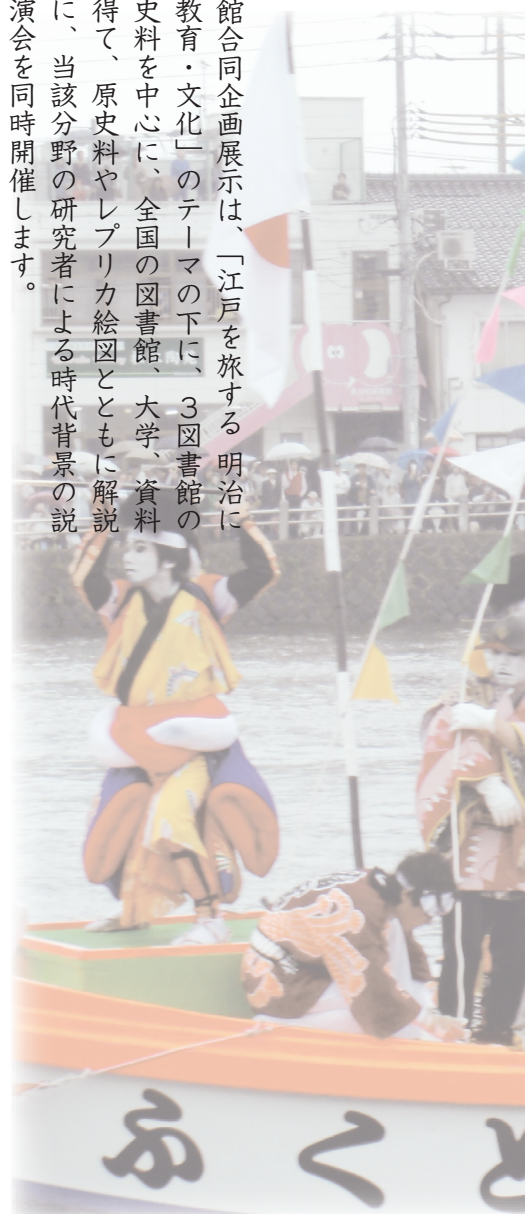


平成二十一年度の3図書館合同企画展示は、「江戸を旅する 明治に学ぶ・山陰の歴史、経済、教育・文化」のテーマの下に、3図書館の所有する資料や地域の貴重史料を中心に、全国の図書館、大学、資料館や教育委員会等の協力を得て、原史料やレプリカ絵図とともに解説パネルを展示します。さらに、当該分野の研究者による時代背景の説明や、資料解説も含めた講演会を同時開催します。

江戸期については、国立国会図書館や国立公文書館、また、地域に散在する近世の出雲、石見、隠岐の国絵図を一同に展示し、比較検証を行い、時代毎に変遷していく歴史・経済的背景を考察します。また、国絵図をベースに地域の近世文書や古記録類から、当時の地理・地誌、測量術、経済・産業、交通や和算など科学的知識の源泉を探るとともに、当時の人々の生活状況を浮き彫りにします。

明治期については、諸外国との軋轢の中で、新国家の建設・発展に貢献する人材を輩出する基盤となった藩校、私塾など、幕末から明治における地域の教育システムと教育力の遷移を辿ります。さらに、ここから巣立って各界で活躍した山陰出身の先覚者達が、幼少期に培われた地縁・人間関係を大切にしながら世界に雄飛していく姿を、史料や逸話などをもとに紹介します。

今回は、松江開府四〇〇年祭との協賛事業として、また、島根大学開学六十周年（ホームカミングデー）や、松江キャンパスの大学祭「凧風祭」とも連携し、より多くの皆様にご参加いただけるような企画としています。この企画展示を通して、山陰地域の豊かな自然、産物、人材、文化遺産等について、江戸から明治というエネルギー豊かな時代を、豊富な展示史料や各界の研究者の方々の熱のこもった講演で体感いただきたいと思います。



出雲・石見・隠岐の 国絵図をめぐる



元島根史学会会長 池橋達雄

江戸幕府は五度国絵図を提出させており、これを「幕府撰国絵図」と呼んでいる。慶長九（一六〇四）年、寛永十（一六三三）年、正保二（一六四五）年、元禄十五（一七〇二）年、天保九（一八三八）年の五度で、年次は幕府が収蔵した年である。うち慶長図は、そのままのものはまだ発見されず、「慶長日本図」の部分として伝世されている。寛永期・正保期・天保期のものは出雲・石見・隠岐とも残っているが、元禄期のものは出雲の分だけが伝わっている。

正保国絵図以降は、縮尺を一里六寸とし、「郷帳」と「城絵図」とをセットとして提出されることとなったが、元禄期・天保期の国絵図は、必ずしも提出時の郡村界・村数・石高などを正確に示していない。

その点「在地国絵図」は資料としてすぐれている。特に出雲では「出雲国十二郡図」寛永十三（一六三六）年、「出雲国十郡絵図」貞享三（一六八六）年、「出雲国十郡絵図」文政四（一八二二）年、石見では「元和年間石見国絵図」元和三〇五（一六一七〜一九）年、隠岐では「隠岐国島後島前図」慶応元（一八六五）年などが注目される。

文化期（一八〇四〜一八）から文政期（一八一八〜三〇）にかけて伊能忠敬が作成した「伊能図」を経て、明治に入り近代的「地図」が成立するが、近世の「絵図」が与える情報も質量ともに重要である。

うなぎ街道を行く



松江市史編纂委員 乾 隆明

安来湊の魚問屋・松江屋佐重さんは、中海産ウナギの大漁に遭遇。「このウナギを大坂へ運んだら儲かるぞ」と思いついた。時は江戸時代の中頃。さっそく松江藩にお願いして許可をもらい、道中安全のために京都の聖護院から菊の御紋章入りの小旗や提灯を下げ渡された。

生きたままのウナギを数十人の男たちが担いで中国山地の山坂を走り、勝山から旭川を岡山まで下し、播磨灘を渡って大坂土佐堀白子裏町・松江藩蔵屋敷付近にウナギ船を留め、京大坂の料亭数軒に販売し、その売上金を担いで四十曲峠を越え、意気揚々と帰国した。

このウナギ送りは宝暦年間から始まり、膨大なウナギが峠を越え、明治末年には貨車送りに代わって「くだいおれの町・大阪」の食文化を作り上げた。

松江藩の「国益」を生み出す産業を紹介した「雲陽国益鑑」には、前頭上位に「上方行きウナギ」がランキングされ、上方から御国に現金を稼ぐ大事な産業として高く評価されている。当時の食品流通を担った元氣な人たちの足跡を訪ねて、安来から大坂までの「うなぎ街道」を歩いた調査結果を報告する。





江戸から明治へ —近代法の成立と松江—

島根大学法文学部教授 居石正和

江戸から明治へ：歴史は大きく動きま
した。社会情勢の変化はさまざまな面で現れま
すが、法の世界もその一つでした。幕末に締
結された不平等条約の解消は明治の大きな国
家目標で、そのためには、日本を欧米流の近
代国家にする必要があります。それは、欧米
で発展した近代法を日本に採り入れ、近代法
が支配する社会へと日本を変えていくことで
した。

近代的な法の世界を日本に採り入れるのに
は、大変な苦勞を要しました。まず、近代
的な法典（民法典や刑法典）を作らねばなり
ません。これには多くの人々が関わりまし
た。この中に、松江出身で民法典や商法典の
編纂に携わった梅謙次郎がいました。次に必
要なのは法の担い手です。代言人（現在の弁
護士）や裁判官・検察官など、法の実務を専
門的に扱う人々が現れます。岸清一はあまり
にも有名ですが、松江市の初代市長である福
岡世徳も代言人でした。新しい法の担い手を
養成するために、法学教育を行う学校がつく
られます。松江にも、短期間でしたが松江法
律学校が設立されます。また、人々の争いを
解決するために各地に裁判所が設置され、明
治九（一八七六）年に、松江裁判所が開庁さ
れました。

明治になり、近代法の波が松江にやってく
る様子、新しい法の世界と人々との関わり
の様子を、皆さんと一緒に見ていきましょう。

二葉亭四迷の松江 —「学校」の誕生—

島根大学法文学部教授 武田信明



二葉亭四迷こと長谷川辰之助（一八六四～
一九〇九）は、日本近代文学の起源に位置す
るとされる文学者である。明治十九年に発表
された「浮雲」は、その内容と文体において
文学史を画する作品であり、またツルゲーネ
フ「あひびき」を始めとする外国文学の翻訳
は、その後の日本の小説文体に大きな影響を
与えたとされる。だが、その二葉亭四迷が少
年期を松江で過ごしていた事実は、ここ松江
でもあまり知られていない。

満十一歳の二葉亭四迷が東京から松江に
やってきたのは明治八（一八七五）年五月。
父吉数が島根県会計官吏だったためである。
殿町十三番地に居住し、内村鱸香の漢学塾相
長舎に入塾、翌明治九年には島根県教員伝習
校に付設された変則中学科（のち松江中学）
に入学した。以降明治十一年二月に上京する
までの二年九ヶ月の間、二葉亭四迷は松江の
地で過ごした。それがどのような生活であっ
たのかは明らかではない。だが、変則中学と
漢学塾の双方に通った彼の教育体験は、明治
初期ならではのものであったと言えるだろ
う。

明治五年の「学制」によって、日本各地で
近代的な「学校」が誕生していく。その草創
期の教育の様子を、二葉亭四迷を軸に探って
みることにしたい。

幕府撰国絵図

江戸幕府が諸国に命じて提出させた国ごとの絵図を「幕府撰国絵図」と呼びます。提出は、慶長・寛永・正保・元禄・天保の五度です。慶長の国絵図は「慶長日本図」の部分として伝えられていますが、国絵図そのものはまだ見つかっていません。慶長・寛永の時は特に基準がなかったようですが、正保からは一里六寸の縮尺とし、主要道と一里塚や港湾の状況など、交通運輸についての情報を記載するよう命じられました。しかし、同時に「たてまえ」が重視され、元禄・天保のものには、時期ごとの郡域・郡村数・石高が正確に記載されているか疑問もあり、情報の読み取りには慎重が必要で、次の「在地国絵図」と合わせて検討しなければなりません。なお、元禄の幕府撰国絵図は、出雲のものしか伝わっていません。

この展示会では、島根県立図書館及び島根大学附属図書館が所蔵する絵図を中心に、国や県内外の大学、個人所蔵の国絵図をデジタル化したものを併せて展示しています。

江戸時代年表						年号	西暦	国絵図	松江藩主	徳川将軍
慶應	天保	文政	宝永	元禄	貞享	正保	寛永	元和	慶長	
1865	1838	1821	1710	1701	1686	1645	1633		1603	
絵図19	絵図18 絵図10 絵図17 絵図12			絵図7 絵図16 絵図9		絵図5 絵図13 絵図14	絵図2 絵図4 絵図15			
	⑩ 定安	⑨ 齊貴 ⑧ 齊恒 ⑦ 治郷	⑥ 宗衍	⑤ 宣維 ④ 吉透	③ 綱近 ② 綱隆	① 直政 (松平)	(京極)		(堀尾)	
⑮ 慶喜	⑭ 家茂	⑬ 家定	⑫ 家慶	⑪ 家斉	⑩ 家治 ⑨ 家重 ⑧ 家繼 ⑦ 家宗	⑥ 家宣	⑤ 綱吉	④ 家綱	③ 家光	② 秀忠 ① 家康

◆ 慶長図



(中国地方部分)



◆ 慶長日本図 慶長年間 絵図1

◆ 寛永図



◆ 隠岐国絵図 絵図4 寛永10年(1633)

◆ 寛永石見国絵図 絵図3 寛永10年(1633)

◆ 寛永出雲国絵図 絵図2 寛永10年(1633)

◆ 正保図



◆ 正保石見国絵図 正保2年(1645) 絵図6

◆ 正保出雲隠岐国絵図 正保2年(1645) 絵図5

◆ 元禄図



◆ 出雲国全図 絵図9 天保9年(1838)写



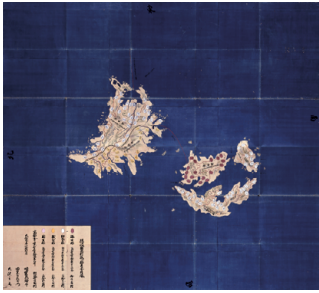
◆ 元禄出雲国絵図 絵図8 宝永7年(1710)写



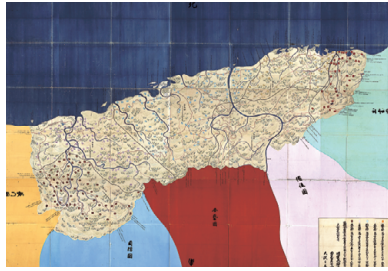
◆ 元禄出雲国絵図 絵図7 元禄14年(1701)



江戸を旅する
明治に学ぶ



◆ 天保石見国絵図 絵図11
天保9年 (1838)



◆ 天保石見国絵図 絵図11
天保9年 (1838)



◆ 天保出雲国絵図 絵図10
天保9年 (1838)

◆ 天保図

在地国絵図

「幕府撰国絵図」に対し、それぞれの地方、国で自主的に作成されたものを一括して「在地国絵図」と呼ぶことにします。こちらの方は、「たてまえ」より「実用」が重視されました。幕府撰に準ずる公的性格をもつものから、郡村役人の地方行政のハンドブックと考えられるものまで多様ですが、ここでは興味ある情報の読み取れるものを中心に紹介します。

天保の出雲国絵図の幕府撰のものとの在地のもの比べる、在地のものが正確です。楯縫・出雲・神門三郡の郡域を見てください。



◆ 出雲国十二郡図 寛永13年 (1636) 絵図13



◆ 出雲国十二郡図 寛永13年 (1636) 絵図14



◆ 石見国絵図 絵図15
元和3-5年 (1617-1619)



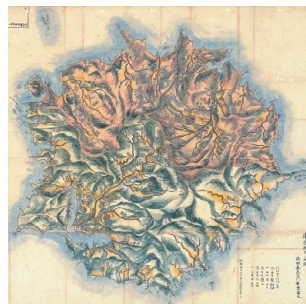
◆ 出雲国十郡絵図 絵図17
文政4年 (1821)



◆ 出雲国十郡絵図 絵図16
貞享3年 (1686) (推定)



◆ 隠岐国島前図・隠岐国島後図 慶應元年 (1865) 絵図19



◆ 出雲国絵図 天保年間 (1830-1844) 絵図18



江戸を旅する
明治に学ぶ

島根大学デジタル・アーカイブのコンテンツから

石井家文書

鳥取市青谷町の石井家は、江戸時代中期から後期にかけて回船業や醸造業を営んだ旧家で、屋号を「夷屋」と称しました。三代目当主の石井世左衛門（一七六六～一八三一）は、仲間と狂歌を詠むことを好む一方、数学や天文学も嗜む文化人でもありました。世左衛門の代から約百年間にわたる『石井記録』には伊能忠敬の測量隊が立ち寄った時のエピソードなども記述されており、当時の文化や社会の様子を物語る資料として価値があります。



◆ 改算記綱目 貞享4年(1687)



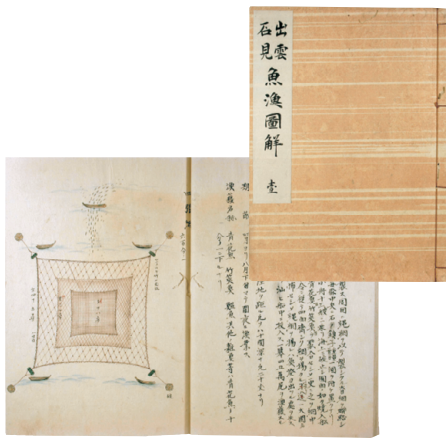
◆ 環海異聞 文化4年(1807)



◆ 天文図解 元禄元年(1688)

その他の産業

明治十四（一八八一）年、明治政府により第二回内国勸業博覧会が開催され、島根県からは、県内の豊富な農具と漁具について詳細な絵を添えて解説した「農具図解」及び「漁具図解」が出品されました。江戸から明治にかけて、産業の発達とともに各地の農村や漁村でも新たな農法や漁法が導入され、生産拡大が図られた様子をうかがい知ることができます。



◆ 出雲石見魚漁図解



◆ 島根縣内農具図解

出雲国のおもな産物

木綿

江戸時代の出雲は良質の綿作地帯で、「雲州木綿」として松江や大坂などへ出荷された。運搬には平田船川から船が利用され、帆船が宍道湖の北側を行き交った。この水運は、酒、醤油などの取引にも利用された。



鉄製品

中国山地の鉄は国内需要の90%を賄っていたが、鉄を原料のまま出荷していたのでは付加価値がつかないため、横浜町にあった「釜範方」で、鍋・釜・庖丁・農具などの鑄物製品として専売した。



薬用人参

六代松江藩主の命により栽培にとりかかったものの、成功するまで四十～五十年もかかった。国内はもとより清国（中国）へまで輸出され、藩の財政を支える産物であった。当時の栽培地は古志原町にあった。松江市内には、薬用人参を扱う役所であった「人参方」の門だけが残っている。



蠟（ろう）

樫（ハゼ）の植え付けを奨励し、実から蠟燭を製造した。蠟燭は当時贅沢品で、南田町に建てられた「木実方」で藩営事業として本格的に製造販売され、大きな収益をもたらした。



江戸から明治の教育

教育関連年表：江戸～明治

年号	西暦	出来事
宝暦8	1758	文明館開設
天明6	1786	養老館開設
安政2	1855	澤野修輔「培塾」を開く
文久3	1863	西洋学校開校
慶應1	1865	修道館開校
明治3	1870	フランス人教師雇い入れる
5	1872	学制公布 修道館閉校
6	1873	雑賀小学校開校
8	1875	教員伝習校開校
9	1876	松江師範学校と改称
10	1877	変則中学を併設
11	1878	松江中学となる
17	1884	女子師範学校開校
19	1886	島根県尋常中学校と改称
23	1890	島根県尋常師範学校と改称
31	1898	松江法律学校開校
36	1903	ラフカディオ・ハーン来松
9	1920	島根県師範学校と改称 島根県女子師範学校と改称 松江高等学校設置

江戸時代、諸藩には藩校が置かれていましたが、ここで学べるのは士族の子弟など一部に限られており、エリート養成のための教育機関という性格を持っていました。これに対し、庶民の教育はもっぱら寺子屋で行われます。規模は大小さまざまで、都市部から農山漁村に至るまで広く普及していました。また、私塾は師弟間の深い人間的なつながりの上に特色のある教育を行っており、藩校とは異なる存在意義を持っていました。

明治五年の学制公布により、教育制度の近代化が始まります。島根県では比較的早い時期から小学校、中学校、師範学校などが次々と開校され、明治期の島根を代表する多くの優秀な人材を育てました。

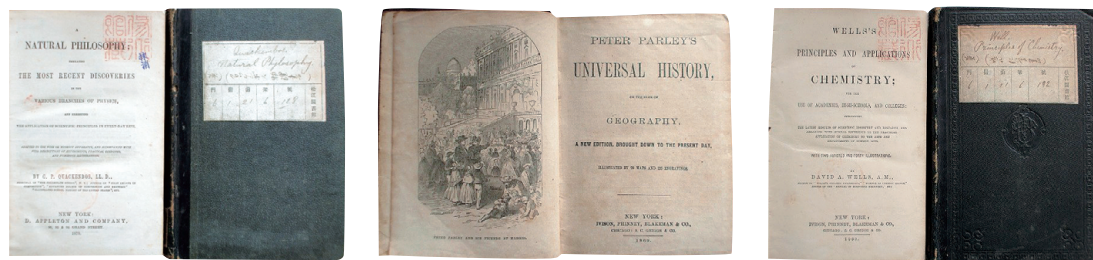
江戸時代の藩校

松江藩では、六代宗衍が開設した「文明館」が藩校の初めです。桃源蔵（白鹿）などが藩儒を務め、儒学を中心に教えられていました。

その後、九代斉貴、十代定安は洋学を積極的に取り入れ、松江に西洋学校を開校しました。江戸藩邸で収集した洋学書を国許へ送ったものが「雲藩図書」として残っています。「文明館」はのちに「修道館」と改められ、明治五年四月に閉館となるまで出雲の最高学府であり続けました。

津和野藩の「養老館」は、福羽美静、西周、森鷗外など多くの知識人を輩出した藩校として有名です。八代藩主亀井矩賢が創設し、十一代茲監によってさらに整備が進み、文武両道を備えた総合的な藩校となりました。

雲藩図書



◆ Natural Philosophy : The Most Recent Discoveries (クロッケンボス『物理書』) 明治3年(1870)

◆ Universal History : on the Basis of Geography (パーレー『万国史』) 明治3年(1870)

◆ Principles and Applications of Chemistry (ウェルズ『化学の原理と応用』) 明治元年(1868)

雑賀の私塾

庶民の学問の場は、寺子屋（初等教育）や私塾（中等教育）でした。寺子屋では、武士、僧侶、神官などが師匠となり、「往來物」と呼ばれる教科書を使って、日常生活に必要な「読み書きソロバン」を教えました。

藩校に入れない下級武士の子弟などで向学心がある者や、藩校教育では満たされない要求をもつ者は私塾で学びました。足軽町であった松江の雑賀は私塾が多く開かれ、教育意識の高い地域でした。若槻禮次郎、岸清一をはじめ、多くの向学心に燃える若者がここで学びました。



◆ 松江市雑賀公民館前の私塾跡碑
雑賀小学校の中に設けられた「雑賀教育資料館」には、当時の資料などが大切に保存されています。



江戸を旅する 明治に学ぶ

明治の学制公布

日本の近代教育は、明治五年八月の学制公布に始まります。明治新政府は、学校の設置を一大急務として実施しました。先に述べた藩校や寺子屋・私塾を統合し、教育の一本化と機会均等を図ろうとするものでした。

松江で最初にできたのは「第七区第一番小学校」(現雑賀小学校)で、以後、各地で小学校が相次いで開校されたのに続き、不足していた教師を養成するための師範学校が設置されました。中学校の開校は全国で三番目という早さで、当時の島根の教育水準の高さと県民の優秀さがうかがわれます。

明治期の教科書



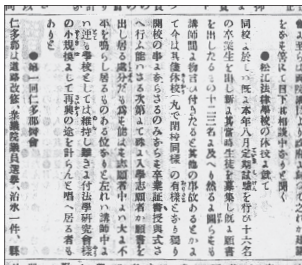
◆ 学問ノススメ 明治6年(1873) ◆ 絵入智慧の環 明治3年(1870) ◆ 尋常小学読本 明治19年(1886)

法律専門学校

明治になると一般庶民の法意識も徐々に高まり、帝国憲法が公布されるなど法律は身近なものになっていきました。桑原羊次郎は島根県尋常中学校を卒業し、英吉利法律学校(現中央大学)で学びました。郷里の松江で法律学校の開設を考えていましたが、明治二十三(一八九〇)年、地元政財界の援助を得て、母衣町の民家に「松江法律学校」を開校することができました。修業年限は二年で開校当初は盛況でしたが、桑原の留学、教師や生徒の減少などの事情により、明治二十五(一八九二)年に閉校をよぎなくされました。



◆ 松江法律学校の生徒募集 『山陰新聞』明治23年4月20日



◆ 松江法律学校の休校に就て 『山陰新聞』明治25年11月19日

明治期の教師たち

澤野修輔

一八二八〜一九〇三

松江の雑賀町に生まれる。身分の低い足輕だったが江戸へ遊学して昌平黌で修行し、帰郷後に「培塾」を開いた。培塾には入門を希望する若者が絶えなかった。その後開校した雑賀小学校の初代校長となった。

内村鱸香(友輔)

一八二一〜一九〇一

松江の中原町に生まれる。京都、大坂での遊学後、昌平黌で頭角を現す。大坂で開いた私塾は人気があったが、藩命で帰郷し藩校教授に就任した。五十五歳で開設した「相長舎」の門下生は三千人を数え、多くの逸材を輩出した。

西田千太郎

一八六二〜一九九七

松江の雑賀町に生まれる。澤野修輔塾、変則中学校(のちの松江中学)で学ぶ。教師となつてからは島根県尋常中学校などで教え、ラフカディオ・ハーン来日時には教頭としてよき理解者、助言者となった。若くして病に倒れたが、博識のうえに人柄も非常に良く、亡くなるまでハーンとの親交が続いた。

ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)

一八五〇〜一九〇四

ギリシャのレフカダ島に生まれる。十九歳でアメリカに渡り新聞記者として活躍後、四十歳で来日し、松江の島根県尋常中学校の英語教師となる。旧き良き日本が残る松江の町を愛し、西田千太郎や学生たちとの交流の中で、最も穏やかな一時期を過ごした。その後、熊本第五高等学校、東京帝国大学、早稲田大学で英文学を教え、日本を紹介する多数の著作を残した。



幼少期

万延元（一八六〇）年、松江藩医梅薫の次男として松江の灘町に生まれまし
た。幼い頃から秀才で、藩主の前で進講
したといわれます。謙次郎の最初の教師
は祖父・竹道でしたが、七歳の時にこの
祖父が亡くなったため、生家から近い雑
賀町にある澤野修輔の「培塾」で、二歳
上の兄とともに学びました。

明治五（一八七二）年は、謙次郎が入
学したばかりの修道館（洋学校）が閉鎖
され、さらに医者であった父が病院の廃
止により職を失うなど、梅家にとって最
悪な年となりました。翌年開校した中原
小学校に入学しますが、こうした逆境が、
謙次郎を猛烈な勢いで勉学に向かわせた
といえます。灘町の人々は、謙次郎を神
童と呼んで褒めそやし、温かく励まし
ました。

青年期

幕末から明治にかけて、優秀な人材を育成するため教育
に力が注がれました。西洋の進んだ思想や技術を取り入れ
るため外国語を学ばせたり、優秀な者には海外留学の機会
も与えられました。武士の世の中が終わり学問を修めれば
立身出世できる時代、向学心のある者は上京して高等教育
を受け、活躍の場を世界へと広げていきました。
梅謙次郎は松江出身で、明治の法曹界を代表する一人で
す。穂積陳重、富井政章とともに日本の民法を起草し、「日
本民法典の父」と呼ばれています。フランス、ドイツで学び、
韓国で法典編纂に尽力するなど国際的に活躍し、明治の立
法史に大きな業績を残しました。

明治七（一八七四）年秋、十五
歳の時に父母とともに上京し、そ
の後、郷里の土を踏むことは二度
とありませんでした。上京後は父
の商売がうまくいかず、苦しい生
活を強いられましたが、東京外国語
学校（現東京外国語大学）仏語科
を首席で卒業した後、司法省法学
校でフランス法を学び、これも抜
群の成績で首席卒業しました。

卒業後、東京法学校（現東京大学法学部）の教員とな
りますが、フランス留学を命じられ、明治十八（一八八五）
年に横浜港から船で出発しました。留学先のリヨン大学
での四年間の成果が博士論文『和解論』で、現地で高く
評価され、リヨン市からヴェルメイユ賞牌が贈られまし
た。その後、ドイツのベルリン大学にも留学し、帰国し
たのは明治二十三（一八九〇）年でした。同じ年の八月、
ラファディオ・ハーンが英語教師として松江に赴任しました。



◆ 和解論原稿
（手書きサインあり）

◆ フランス・リヨン
大学留学時代



◆ 民法の三起草者
左から富井政章、梅謙次郎、穂積陳重

帰国後、民法起草委員となり
ます。民法は穂積陳重、富井政
章とともに、また商法は田部芳
岡野敬次郎とともに立案起草
し、民法総則、物権法、債権法、
親族法、相続法などの作成に貢
献しました。
帝国大学法科大学（現東京大
学法学部）学長、和仏法律学
校（現法政大学）初代校長、内
閣法制局長官などを歴任し、伊
藤博文の要請で韓国政府の法律
最高顧問となりましたが、通商
条約廃棄通告と日韓併合の明治
四十三（一九一〇）年、五十歳
の若さで急逝しました。『民法
要義』、『民法講義』、『日本商法
義解』など生涯を通じて二十冊
に及ぶ著作があり、特に『民法
要義』五巻は、今も研究者の必
読文献になっています。

法学者としての実績



父を語る…梅徳(三男)

父は明治四十三年八月、韓国京城でチフスにかかり、二十五日に満五十歳で亡くなった。日韓合邦がその月の二十九日だから、合邦直前といってもよいが、兄の記憶によると、同じ頃、父はある席である軍人と合邦を論じ、さかんに反対していたというから、合邦を見ずに死んだことには心残りではなかったであろう。私たちは死に目にあわなかったが、酒好きの父はそうとう熱があるのにウイスキーなんか飲んでいたり話だ。もっとも平生から病気に強く、三十九度ぐらい熱があっても大学の講義に出かけていた。

……(中略)……



◆ 家族写真
後列左より 長女梅枝、夫人かね
前列左より 四男光、三男徳、祖母くに、
次男震、長男緑

卒業の翌年、文部省留学生としてフランスに行き、先輩富井政章先生の学んだリヨン大学の法科に入った。そして二十二年まで同大で勉強し、ドクトゥール・アン・ドロア(法学博士)の学位を得たが、その時の成績がよかったというので、リヨン市から賞牌をもらい、論文の『和解論(La transaction)』は市費で出版された。それからドイツに渡って一年ほどベルリン大学に学び、二十三年に帰朝して、法科大学で講義することになった。

留学中の話でおもしろいと思うのは、パリのエッフェル塔にのぼった話である。エッフェル塔は高さが三〇〇米もあり、エレベーターの設備があったが、父はそれによらず外側の梯子を昇降したので、新聞にも出てたいへん騒がれたそうである。これはパリに留学していた本願寺の藤島了穂師の話であるが、元来きわめて不器用で、そのくせ負けずぎらいの父のやりそうなことだと、今でも私たちを微笑ませる。あるいは、リヨンの市賞状よりこの方が父を得意にあらせたかもしれない。

(高久茂「切手になった日本文化人」より)

八雲と梅謙次郎

梅は、松江ゆかりの小泉八雲とも交流がありました。三十歳の時に結婚した旧松江藩士の娘かねは、八雲と結婚した小泉セツの親戚にあたり、二人は遠縁の親戚となりました。八雲は梅を大変信頼し、尊敬の念を抱いていました。

梅が東京帝国大学の教員をしていた頃、八雲も上京し、同じ大学で英文学の講義をしました。のちに八雲が帝国大学を解任される前後、多忙な時間をさいて何度か八雲を訪ねています。八雲が死を予感して、東京の大久保の書齋で書いた梅宛の遺書には、「私が死んでも泣く決していけません、小さい瓶買いまししょう。三銭あるいは四銭くらいのもので、私の骨を入れるために。そして田舎の淋しい寺に埋めて下さい」と記されています。八雲が亡くなった折には、遺族・親戚の代表を務めました。

切手になった梅謙次郎

昭和二十四(一九四九)年、郵政省は、我が国の世界に誇れる文化先駆者の肖像を郵便切手として発行しました。梅は十八名の文化人の中に選ばれ、切手は昭和二十七年八月に一千万枚発行されました。



◆ 梅切手 昭和27年8月発行

明治文庫

松江地方裁判所「明治文庫」から寄贈された、明治期を中心とした法律書、判例集など約一、一〇〇点を、島根大学附属図書館で所蔵しています。明治新政府により近代法制が整備されていく過程で刊行されたもので、近代日本法制史の研究において貴重な資料群です。

梅謙次郎の著書である『民法要義』『民法原理』『最近判例批評』『日本賣買法』『民法債権』などが含まれています。



◆ 梅謙次郎の著書



◆ 明治文庫の資料

岸清一

松江出身の明治期の文化人といえば、すぐに岸清一と若槻禮次郎が思い浮かびます。二人は一歳違いで、ともに松江市雑賀町の出身という共通点があります。岸は抜群の成績で順風満帆の人生を歩み、近代スポーツ界にその名を残しました。若槻は苦学し、叔父の援助で学びながら政治家となり、初の島根出身の内閣総理大臣となったことはいまでもありません。

同じ頃、松江電灯会社を創立した桑原羊次郎は、松江の末次本町に生まれました。美術工芸に深い造詣があり、日本美術の優秀さを海外に紹介したり、郷土の産業や文化など多方面に活躍しました。明治初期、同じ中学校で学んだ三人の少年は、歩む道は異なったものの、それぞれの分野で世界的な業績を残しました。



◆ 第1回目の洋行
明治30年頃



◆ 母校訪問 昭和2年10月

慶応三（一八六七）年、松江藩士岸伴平の次男として雑賀町に生まれました。明治六年に開校になった「第七区第一番小学校」（現雑賀小学校）に入学し、首席で通すという抜群の成績でした。島根県尋常中学校を卒業後、上京して百倍以上の難関を突破し、東京帝国大学法学科に入学します。卒業後は代言人（現在の弁護士）として活躍しました。

岸はまた、日本近代スポーツにおいても大きな業績を残しました。大日本体育協会会長、国際オリンピック委員会委員に就任し、国際的に活躍して「スポーツの父」と慕われました。

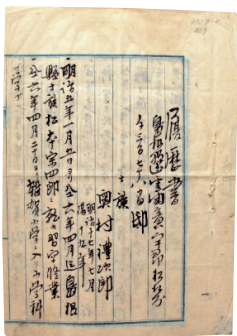
自身が苦学したため、私財を育英事業に提供して若者に勉学の機会を与えたり、八雲記念館の建設に貢献し、私費を投じて遺品を収集したりしました。世話になった学生たちにより、島根県庁前に銅像が建てられています。

若槻禮次郎

島根が生んだ内閣総理大臣、若槻禮次郎は、慶応二（一八六六）年、足軽奥村仙三郎の次男として雑賀町に生まれました。岸と同じ小学校に入学しますが、家が貧しく、家計を助けるために中学校を中退し代用教員を務めるなど、岸とは違い苦難の道を歩きました。学費を条件に叔父の若槻敬の養子となり、岸に一年遅れて上京することができました。

東京帝国大学法科を首席で卒業した後、官吏になる道を選び大蔵省（現財務省）に入省しました。大蔵大臣、内務大臣を経て、大正十五（一九二六）年と昭和六（一九三一）年の二度にわたって内閣総理大臣を務めました。

この時の松江市民の喜びようは大変なもので、ドラを打ち鳴らし、提灯行列を繰り出す騒ぎでした。



◆ 若槻禮次郎
直筆履歴書
明治17年頃



桑原羊次郎

明治元（一八六八）年、桑原愛三郎（通称太助）の第四子として末次本町に生まれました。島根県尋常中学校から英吉利法律学校（現中央大学）に学び、卒業後はアメリカのミシガン大学に留学してマスター・オブ・ローの学位を得ました。

帰国後、彫金技術や鑑定法、また浮世絵の研究を始めるとともに、作品の蒐集にも力を注ぎました。美術工芸に関する研究と鑑識眼は世界的に高く評価され、明治四十三（一九一〇）年の日英博覧会では美術部門を担当、翌年のイタリア万国博覧会では日本美術館主任を務めました。

郷里においては、松江電灯会社や松江法律学校の創立に関わったり、松江銀行取締役、松江盲啞学校長、松江図書館（現島根県立図書館）理事などを努めたりと、産業、文化、教育など各方面で活躍した社会事業家でした。また、郷土資料の蒐集に力を注ぎ、このうち書籍類は、島根大学附属図書館に「桑原文庫」として保存されています。



◆ 桑原羊次郎著書



◆ 桑原文庫



関連人物略年譜

年号	西暦	年齢	梅 謙次郎	年齢	若槻禮次郎	年齢	桑原羊次郎	年齢	岸 清一	
万延 1	1860	0	灘町に誕生							
元治 1	1864	1	千字文・孝経を暗唱							
慶応 1	1865	5	大学・中庸を学ぶ							
慶応 2	1866	6	澤野修輔の塾で学ぶ	0	雑賀町に誕生			0	雑賀町に誕生	
慶応 3	1867	7		1				1		
明治 1	1868	8		2			0	末次本町に誕生		
明治 2	1869	9	藩校修道館に入る	3			1			
明治 4	1871	10	藩主に日本外史を進講	5	澤野修輔塾で学ぶ		3			
明治 5	1872	12	洋学校入学	6			4			
明治 6	1873	13	小学校入学	7	雑賀小入学		5		澤野塾・尾原塾で学ぶ	
明治 7	1874	14	父母とともに上京	8			6		雑賀小入学	
明治 8	1875	15	東京外国語学校入学	9			7			
明治11	1878	18		12	内村友輔塾で学ぶ		10			
明治12	1879	19		13	松江中学校二科入学		11		12	松江中学入学
明治13	1880	20	司法省法学校入学	14			12	第一中学校入学	13	内村友輔塾で学ぶ
明治14	1881	21		15	松江中学退学・大谷小補助員		13		14	
明治15	1882	22		16	大津小授業生		14		15	
明治16	1883	23		17			15		16	上京
明治17	1884	24	司法省勤務・文部省勤務	18	上京、司法省法学校入学		16		17	大学予備門に編入
明治18	1885	25		19			17	上京、英吉利法律学校入学	18	東京帝国大学法科入学
明治19	1886	26	リヨン大学で学ぶ	20	若槻姓となる		18		19	
明治22	1889	29	「和解論」で学位取得 ベルリン大学で学ぶ 帝国大学法科大学校教授	23	帝国大学法科大学法科入学		21	東茶町へ転居	22	代言人免許 開業
明治23	1890	30	松本かねと結婚	24			22	津久井春子と結婚 米国シシガン大学留学	23	
明治24	1891	31		25	若槻トクと結婚		23		24	
明治25	1892	32		26	大蔵省試補		24	ミシガン大学院修了	25	
明治26	1893	33	法典調査会主査委員 民法商法等の立案起草に従事	27			25	彫金技術・鑑定法を学ぶ	26	弁護士登録
明治27	1894	34		28			26	松江商業会議所特別会員	27	
明治28	1895	35		29			27	松江電燈株式会社社長	28	
明治29	1896	36	「民法要義」出版	30			28	松江銀行監査役	29	
明治30	1897	37	東京帝国大学法科大学長	31			29		30	法律事務取調のため英米両国視察
明治31	1898	38		32	主税局内国税課長		30	松江銀行取締役	31	坂井澄子と結婚
明治32	1899	39	和仏法律学校長	33			31		32	
明治33	1900	40	文部省総務長官	34			32	中央刀剣会本部審査委員 松江図書館理事	33	
明治34	1901	41		35			33	東京金工協会学芸賛助員 鴻池銀行神戸支店長	34	
明治36	1903	43	法政大学初代総理	37			35		36	
明治37	1904	44	法政大学に速成科設置 小泉八雲葬儀委員長	38	主税局長		36		37	米国視察
明治39	1906	46	韓国政府不動産法調査会総裁	40	第一次西園寺内閣の大蔵次官		38		39	
明治40	1907	47	韓国裁判所構成法起草	41			39		40	
明治41	1908	48		42	第二次桂内閣の大蔵次官		40		41	
明治42	1909	49		43			41	日英博覧会美術部計画委員	42	
明治43	1910	50	ソウルで死去	44			42	日英博覧会美術部担当	43	法学博士の学位授与
明治44	1911			45	勅撰貴族院議員		43	イタリア万博日本美術館主任	44	
明治45	1912			46	第三次桂内閣の大蔵大臣		44		45	法律取調委員
大正 2	1913			47			45		46	
大正 3	1914			48	第二次大隈内閣の大蔵大臣		46	八雲会設立	47	
大正 4	1915			49			47	山陰盲啞保護会理事長 馬場常子と再婚	48	東京弁護士会会長
大正 5	1916			50			48		49	大日本体育協会副会長
大正 6	1917			51			49	私立松江盲啞学校長 島根県家庭興業株式会社社長	50	
大正 8	1919			53			51	島根県水産株式会社社長	52	岸育英事業創設
大正 9	1920			54			52	衆議院議員当選	53	日本漕艇協会会長
大正10	1921			55			53		54	大日本体育協会会長
大正13	1924			58	加藤内閣の内務大臣		56	日本国際協会島根県支部長	57	パリオリンピック大会日本団長 国際オリンピック協会(ILO)委員 極東体育協会名誉会長
大正14	1925			59			57		58	
大正15	1926			60	第一次若槻内閣成立		58		59	
昭和 2	1927			61	総辞職		59		60	第一東京弁護士会長
昭和 3	1928			62			60		61	アムステルダムオリンピック大会日本団長
昭和 4	1929			63			61		62	小泉八雲遺品を松江市譲受に尽力
昭和 5	1930			64	ロンドン軍縮会議主席全権		62		63	
昭和 6	1931			65	第二次若槻内閣成立		63		64	
昭和 7	1932			66			64		65	貴族院議員
昭和 8	1933			67			65		66	ロサンゼルスオリンピック大会日本団長
昭和 9	1934			68			66	島根県社会事業連盟理事長	67	東京の自宅で死去
昭和19	1944			78	近衛らと東条内閣の更迭を画策		76			
昭和20	1945			79	ポツダム宣言受諾の重臣会議列席		77			
昭和21	1946			80	東京裁判の証人に立つ		78			
昭和24	1949			83	伊東の別荘で死去		81	松江市文化功労者表彰		
昭和25	1950						82	島根県文化功労者表彰		
昭和31	1956						88	東茶町で死去		

貴重資料とデジタル・アーカイブ

● デジタル画像データと複製絵図

企画展示で使用した国絵図は、撮影フィルムのデジタル変換や、原資料を直接デジタル撮影して複製出力したものです。デジタル撮影機材や画像処理技術の進歩により高品質な画像データを得ることができ、高精細な複製出力やデジタルデータの特性を生かした多様な調査・研究、電子展示が可能です。

近年、貴重な文化遺産である絵図類についても、研究・調査資料やデジタル・アーカイブの重要なコンテンツとして電子化及び公開が進行し、原資料では利用上の制約があったものもネットワーク上から利用できるものが増えています。今回の企画展示では、各所蔵機関や個人所蔵者の方々のご協力により、出雲国の各時代や、点数の少ない石見国、隠岐国部分も相当数を収集することができました。

● ネットワークで公開中のデジタル貴重書：絵図類、和漢書、古記録、古文書等の利用案内

国立国会図書館

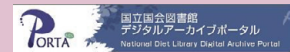
貴重書画像データベース (<http://rarebook.ndl.go.jp/>)

国立国会図書館が所蔵する重要文化財、彩色資料等の画像データ検索、閲覧が可能。

貴重書画像データベース

デジタルアーカイブポータル(PORTA) (<http://porta.ndl.go.jp/>)

国内の電子情報資源や情報提供サービスへナビゲートする総合的なポータルサイトで、国立国会図書館のほか国立公文書館、国内大学・研究機関、青空文庫等複数のデジタル・アーカイブを対象に一元的な検索ができ、コンテンツやサービスの利用が可能。



近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>)

国立国会図書館の明治期・大正期刊行図書のうち、著作権処理済みのものを収録した画像データベース。



国立公文書館

デジタルアーカイブシステム (<http://www.digital.archives.go.jp/>)

国立公文書館所蔵の公文書、古書・古文書等の[インターネット閲覧室]。

国立公文書館 デジタルアーカイブ

デジタル・ギャラリー (<http://jpimg.digital.archives.go.jp/kouseisai/>)

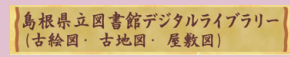
重要文化財や国絵図等の高画質・大容量デジタル画像の[インターネット展示室]。



島根県立図書館

デジタル・ライブラリー (<http://ltis.pref.shimane.jp/>)

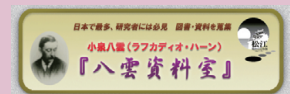
島根県立図書館所蔵の近世古絵図・屋敷図、社寺図、明治時代以降の古地図等のデジタル画像を提供。



松江市立中央図書館

八雲資料室 (<http://www.web-sanin.co.jp/matsue/plover/library/yakumo.html>)

松江市立中央図書館のホームページ「八雲資料室」から、ラフカディオ・ハーンや関係者の自筆書簡、作品の草稿等の画像データを提供。



島根大学附属図書館

デジタル・アーカイブ (<http://www.lib.shimane-u.ac.jp/0/collection/da/da.asp>)

附属図書館研究開発室の中で、島根大学所蔵資料及び地域の貴重資料の調査・電子化・保存・利活用を支援するため、「デジタル・アーカイブシステム」を構築しています。収録コンテンツは、絵図類、古文書、和漢書や古医書、古記録、近世版本など多岐にわたり、権利処理や公開ステータス・ユーザー認証、利用条件管理等の諸機能により、画像データを研究・教育・調査活動に生かすとともに、可能な資料から順次公開を行っています。



発行：平成21年10月

主催：3館合同企画展示・講演会実行委員会(島根県立図書館・松江市立図書館・島根大学附属図書館)

共催：島根大学ミュージアム

協賛：島根大学ホームカミングデー(開学60周年記念大会)、松江開府400年祭推進協議会、島根大学松江キャンパス“凧風祭”

後援：松江市、松江市教育委員会、島根県教育委員会、山陰中央新報社、朝日新聞松江総局、毎日新聞松江支局、読売新聞松江支局、産経新聞松江支局、中国新聞社、新日本海新聞社、NHK松江放送局、山陰中央テレビ、BSS山陰放送、日本海テレビ、山陰ケーブルビジョン株式会社

協力：国立国会図書館、国立公文書館、広島大学図書館、岡山大学附属図書館、島根県立古代出雲歴史博物館、浜田市教育委員会、津和野町教育委員会、隠岐の島町教育委員会、野津隆氏、石井洋氏、雑賀教育資料館



松江開府400年祭

記念事業